Contents

［特集］
作家・澤田瞳子さん
湖北、観音の里へ
文＝ペリー荻野

第一章 観音に守られた里 22
高月観音の里歴史民俗資料館／渡岸寺観音堂（向源寺）

第二章 仏の笑みを守る人々 30
己高閣・世代閣／石道寺／安念寺／赤後寺（日吉神社）

40 湖北、観音の里へ［案内図］

特別企画 心ほどける美食の宿 42
滋賀オーベルジュ探訪
おいしいもんには理由がある 文＝土井善晴

56 **北の大地と六花亭**［北海道河西郡中札内村・帯広市］

9 京都の路地 まわり道
文＝千宗室
南座

11 ひとときエッセイ「そして旅へ」
文＝渡辺佑基
寒いぞ北極

新連載 諸国名産お国言葉採集 13
文＝篠崎晃一
ほっこり［京都市］

14 Interview しなやかな挑戦
文＝森綾
田中泯 ダンサー・俳優

47 柳家喬太郎の旅メシ道中記
奄美の味！ もとじの鶏飯［鹿児島市］

48 地元にエール これ、いいね！
モダンな砥部焼［愛媛県伊予郡砥部町］

50 帰ってきた！ みほとけさんの奈良仏めぐり～ユニーク編～
金峯山寺 秘仏本尊・金剛蔵王大権現［奈良県吉野郡吉野町］

55 新幹線で建築さんぽ 文＝甲斐みのり
豊橋市公会堂［豊橋駅］

62 旬 News & Topics

64 美 Art & Entertainment

66 遊 Event & Festival

旅の小箱 from JR西日本、JR東海 68
北陸デスティネーションキャンペーン
北陸で見つける特別な時間

70 平翠軒
「お酒のお供セット ごちそうの宝箱」

71 ICO+〈イコプラ〉キャンペーン
WESTERポイントが大増量！

72 伊達政宗 vs 真田幸村 東海道で対決！

75 オンラインショップ「いいもの探訪」で
東海道新幹線開業60周年
記念商品を販売中

77 新幹線にまつわる
皆様からのエピソードを公開中

78 ひとときの倶楽部
読者からのお便り
今月のプレゼント など

80 次号のお知らせ

82 ルートマップ
東海道・山陽新幹線時刻表

長浜市の安念寺で“いも観音”を前に語らう澤田瞳子さん（左）と世話方の藤田道明さん
写真＝佐々木香輔

長浜市の己高山〈こだかみやま〉にある鶏足寺（旧飯福寺）周辺の見事な紅葉　写真＝© HIDEKI NAWATE/SEBUN PHOTO/amanaimages

は読者プレゼントがあるページです

※本誌に掲載している施設やイベント等の情報は2024年9月現在のものです。
お出かけの際は現地にお確かめください。また、価格のうち特に表記のないものは税込です

特集

作家・澤田瞳子さん
湖北、観音の里へ

旅人＝澤田瞳子
Sawada Toko
文＝ペリー荻野
Perry Ogino
写真＝佐々木香輔
Sasaki Kyosuke

古く美しい観音像が多く残ることから
「観音の里」と称される湖北・長浜。
西の比叡山、北の白山信仰の影響を受けながら
平安時代には仏教文化が栄え、
長浜市のほぼ中央に位置する伊吹山系の
己高山にはいくつもの寺院が建てられました。
一方、北国街道の要衝でもあったこの地は、
姉川合戦や賤ケ岳の戦いの舞台ともなり、
激しい戦乱や焼き討ちに見舞われます。
寺が廃絶した後、仏像は山を下り、
惣村の人々が「氏仏」として守り継いできました。
いまも変わらず、神宿る山のふところで
大切に祀られている仏像を、
歴史小説作家・澤田瞳子さんが訪ねます。

湖北における山岳仏教の拠点であった己高山の麓に立つ文化財収蔵庫・己高閣〈ここうかく〉には、柔和なお顔立ちの十一面観音がおわす

第一章 観音に守られた里

長浜の仏像を訪ねる旅は、澤田さんが学生時代から心ひかれてきた渡岸寺観音堂（向源寺）の国宝・十一面観音立像から。その前に、高月観音の里歴史民俗資料館館長の秀平文忠さんに、長浜では地域の方々がどんなふうに仏像をお守りしているのか、教えていただきました。

賤ヶ岳の山麓からリフトに乗り、山頂までの道を歩けば、水を湛えた琵琶湖や静かな余呉〈よご〉湖、長浜の集落が一望できる　写真＝アマナイメージズ

仏像巡りの前に訪れたい 高月観音の里歴史民俗資料館

林の間をするすると一直線に上るリフトを降りて、土の道を進むと、標高421メートルの賤ヶ岳の山頂に着いた。眼下には、濃い緑の山々と広大な琵琶湖。水面にはさざ波が立っている。竹生島は見えるが、対岸はかすんでいて見えない。古代の人々は「淡海（近江）」と呼んだ。右手には「鏡湖」といわれる余呉湖が青く輝いている。戦国時代、ここが激戦の場だったとは信じられないほど、静かで穏やかな風景だ。

琵琶湖の北、湖北地域は、畿内と東海、北陸を結ぶ交通の要衝で、古来、さまざまな文化・物資が行き交った。平安時代に入ると、各集落に神社、寺院が建立され、神像や仏像も盛んに作られた。中でも観音像は、個性も豊かで、広く人々の信心を集め、大切に守られてきた。長浜市高月町、木

“東洋のビーナス”とも称される渡岸寺観音堂（向源寺）に安置された国宝の十一面観音立像

［右］渡岸寺観音堂　［左］1年を通じ無休の体制で守るのは、渡岸寺地区の世話方の皆さん。左から理事の山岡和士さん、山岡昭紀さん、澤田さんを挟んで、長谷川知司さん

脈々と続いてきた使命

十一面観音立像は、管理の行き届いた収蔵庫に平安時代後期作の大日如来座像（重要文化財）、阿弥陀如来座像（滋賀県指定有形文化財）とともに安置され、16人の理事が交代で参拝者の受付や案内を続けている。

祖父も父も理事を務めてきたという山岡和士さんは、子どもの頃から維持管理の苦労を聞かされてきた。

「豪雪になると修理が必要でしたし、1950（昭和25）年のジェーン台風に直撃された時は、本堂の屋根が壊れて空が見えたそうです。70年代半ばまでは、法要を開催するため、各集落から毎年新米を1升ずつ寄付してもろてたこともありました。拝観料で賄えるようになったのは、井上靖さんの小説『星と祭』が有名になってからのことです」（山岡さん）

『星と祭』は、事故で娘と息子を亡くした父親ふたりが、鎮魂の思いを抱えて十一面観音像を巡る旅を続ける長編小説。1971（昭和46）年に朝日新聞に連載されると、多くの小説ファンが湖北を訪れるようになった。

紅葉の頃には月に1万人が来訪する。

「私たちは年中休まず、ご参拝の方をお迎えします。秋はもちろん、新緑の青紅葉のシーズンもお薦めです」（山岡さん）

東京駅から徒歩約5分！
長浜の観音様に会える

東京長浜観音堂

長浜市は市内の観音像を月替わりで1体ずつ出張展示する「東京長浜観音堂」を東京・日本橋に開設している。今年12月1日までの展示をもって閉館となり、最後の会期となる11月1日（金）～12月1日（日）では、渡岸寺観音堂の十一面観音菩薩像（滋賀県指定有形文化財）の展示を予定。

令和6年度第3回展示
「渡岸寺観音堂　十一面観音菩薩像」

期 11月1日（金）～12月1日（日）
＊第1章で紹介している国宝の十一面観音立像とは別のお像です

住 東京都中央区日本橋2-3-21
八重洲セントラルビル4階
☎ 080-1620-2090
時 10時～18時
（11月24日のみ13時～）
休 月曜（祝日の場合は翌日）
料 無料

第二章 仏の笑みを守る人々

長浜市内には、観音像が100以上あるといわれます。それらを守り伝えてきたのは、博物館や美術館ではなく、惣村の歴史を受け継ぐ、地域の人々の集まりです。これは数百年もの間、それぞれの「氏仏」を大切にお世話してきた、長浜独特の文化であると言えましょう。

山岳信仰の拠点だった己高山には、いまも寺跡が残る。そのひとつ、鶏足寺（旧飯福寺）へ至る道はもみじのトンネルに続く石段で、ハイカーたちも訪れる

滋賀県最初の文化財収蔵庫 己高閣・世代閣【ここうかく・よしろかく】

次に澤田さんが目指したのは己高山（こだかみやま）の麓、古橋（ふるはし）地区にある己高閣と世代閣だ。

己高山は、近江国の鬼門（東北）に位置し、奈良・平安の時代から山岳信仰の拠点として栄えた。しかし、明治以降の廃仏毀釈や地理的な事情で、山の寺院は次々と廃寺となる。己高閣と世代閣は、守る人がいなくなった仏像や寺宝を収めるため、村人たちによって建てられた収蔵庫である。

1963（昭和38）年に開館した己高閣の中心には、かつて山頂付近にあった鶏足寺（けいそくじ）の十一面観音立像がおわす。

「鶏足寺は、行基さんが開かれたお寺です。一度は衰えたのですが、後に最澄さんがこの地をお訪ねになった時に霊感を感じられたんですな。鶏に道案内されて行ってみると、十一面観音さんの仏頭だけが出ておられて、『おい、最澄さん、胴体を足してこ

己高閣の十一面観音立像は、りりしいまなざしの中にもおおらかな母性が感じられる

鶏足寺の参道は、11月中旬から下旬にかけて燃えるような紅葉に彩られる。己高閣・世代閣から鶏足寺までは約800メートル。約20分のハイキングだ　写真＝©HIDEKI NAWATE/SEBUN PHOTO/amanaimages

神将像とともに薬師堂（旧戸岩寺）の魚籃（ぎょらん）観音像などが安置されている。左手に魚の尾をのぞかせた魚籠（後世の補作）を持つ魚籃観音は珍しい。空海が唐からのお土産として、最澄に贈った仏像ともいわれている。収蔵前はろうそくの煤（すす）で真っ黒だったという。

「過去に作り直された形跡があり、本来、手に何をお持ちになっていたかはわかりません。上半身が裸形像なので、衣のパーツは別材で作られていたのかもしれない。いろいろな可能性を感じさせるお像です」（秀平さん）

寺宝を守る自治の精神

地区の世話人は18人。高齢化が進む中、世話人以外の人たちとも協力して草刈りなどを進める。

「生活、健康、いろいろな事情のある方もお参りに来られます。私たちは、どうかお元気で10年後にまた訪ねてきてくださいと言います。きっとその時も、観音さんがよいお顔で迎えてくださいますよ。そのために我々は、皆さんから頂いた拝観料と志納金をすべて浄財として積み立てて、入院代（修理費用）にします。村人にとっては有名な仏様も名もない仏様も、ともに1300年を過ごされた大切な方なので、順番に入院していただく。200年、300年、過去のご浄財のおかげで私たちがいま、仏

〔ロテル・デュ・ラク〕
野生の鹿 樹脂ハーブ 夏野菜　松の葉で炙った新鮮な鹿肉と滋賀県産の野菜。朝摘みのハーブが香る

特別企画

心ほどける美食の宿

滋賀オーベルジュ探訪

Auberge in Shiga

“マザーレイク”琵琶湖。そこは、宿泊できるレストラン、オーベルジュに欠かせない土地の恵みに満ちた場所。湖畔と森の中、趣の違う二つの美食宿を巡ります。

文=北阪昌人 Kitasaka Masato　写真=阿部吉泰 Abe Yoshihiro

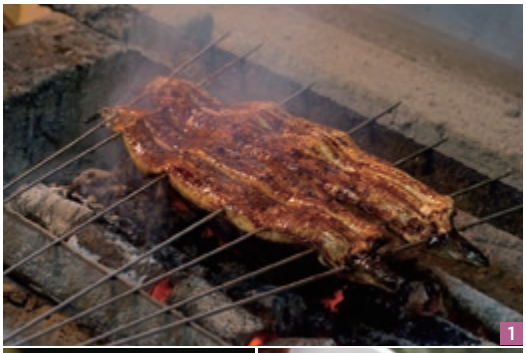
〔オーベルジュメソン〕
鮪 フルーツトマトとパプリカのペペロナータ
滋賀県産のトマトは、比良〈ひら〉山地の伏流水が育んだ宝物

足を延ばして味わいたい

湖国の恵み

Blessing of Shiga

琵琶湖の恵みのひとつ、鰻。湖畔に多くの名店が並ぶ中、特に長い伝統を受け継ぐのが室町時代創業の「山重〈やまじゅう〉」。料理長が厳選した鰻と、400年以上前から研鑽を積み重ねた技が織りなす鰻料理が愛されてきた。琵琶湖の天然鰻のほか、各地のブランド鰻も味わえる。



1 一匹一匹の個体を見極めた「焼き」の技が鰻のうま味を最大限に引き立てる　2 出汁を利かせた大人気のうまき　3 独自配合のスモークチップが香る鰻の燻製

うなぎ料亭山重 瀬田本店
☎0120-13-8103　所滋賀県大津市瀬田1-16-15　時11時～15時(LO14時)、17時～21時(LO20時)　休火曜

創業寛延年間、270年以上愛されている「福井弥平商店」は比良山系の伏流水の恩恵を受け継ぐ蔵元。豊かな里山の米を大切に地元の恵みで酒を醸す。江戸時代から伝わる手法で造る「雨垂れ石を穿つ」や棚田保全を目指す「里山」など、銘酒で地域復興の一翼を担っている。

1 滋賀の山田錦を使った純米大吟醸「萩乃露 白銀ラベル」　2 特別純米「雨垂れ石を穿つ」(左)と棚田のこしひかりで造る「里山」　3 近江最古の大社・白鬚神社も近い

福井弥平商店
☎0740-36-1011　所滋賀県高島市勝野1387-1　時9時～17時　休土・日曜、祝日

Information

滋賀県観光キャンペーン **いこうぜ♪滋賀・びわ湖** **【期間】2025年10月31日(金)まで**

美しい琵琶湖をはじめとする滋賀の魅力を伝えるキャンペーンを実施中です。さまざまな取り組みを通じ、水・琵琶湖に根差した文化に触れる「観る」「食す」「体験する」の3つの感動を生む滋賀の観光情報を発信します。スタンプラリーへの参加やクーポンブックを手に入れて、おトクに滋賀を旅しましょう！

https://goshiga.biwako-visitors.jp/

クーポンブック

滋賀県内にある70以上の観光施設やお店で、割引や粗品などの特典を受けられるクーポンブックを発行しています。ブックを受け取れなかった方でも、キャンペーンサイトからクーポンブックを印刷し、対象施設で提示していただくことでご利用可能です。

クーポンの一例

キャンペーン特別企画

ちはやふる×しが鉄旅 デジタルスタンプラリー

百人一首かるたの聖地である近江神宮や北の近江(長浜市・高島市・米原市)などを巡ってデジタルスタンプを集めると、先着または抽選で素敵な賞品がもらえます。**【期間】2024年12月20日(金)まで**

https://www.nta.co.jp/maas/shigasr

おいしいもんには理由（わけ）がある

第71回

文＝土井善晴
Doi Yoshiharu
写真＝岡本 寿
Okamoto Hisashi

ビスケットにレーズン入りのバタークリームをたっぷり挟んだ六花亭の「マルセイバターサンド」は今も昔も北海道土産の定番だ

北の大地と六花亭

《北海道河西郡中札内村・帯広市》

六花亭の菓子作りは、十勝を開墾した先人への崇敬や未来にはばたく子どもへの愛に満ちていました。

中札内村にある「六花の森」は、10ヘクタールの広大な敷地に複数の小さな美術館やレストランが点在する庭園地だ。梅花藻〈ばいかも〉が咲く清らかな小川が流れ、六花亭の包装紙に描かれた北海道の山野草が植えられた花畑の中を散策できる。晴れの日は雄大な日高山脈の借景も見事

どい よしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』(新潮社)、当連載をまとめた『おいしいもんには理由がある』(ウェッジ)など著書多数。

北海道は開拓の地。その歴史は伊能忠敬の東蝦夷地の海岸測量（1800／寛政12年）、間宮林蔵の樺太探検・間宮海峡の発見（1809／文化6年）に始まります。江戸幕府は鎖国政策で、貿易国をオランダと中国に制限し、長崎を唯一の貿易港としました。しかし、米露から自由貿易を迫られ、箱館（函館）を開港。それを機に、幕府は松前藩から蝦夷地を取りあげ、直接支配するようになりました。ロシアとの国境問題に危機感があった明治政府は、1869（明治2）年、蝦夷地を「北海道」と命名、本格的な開拓指令を発すると、多くの人が本州から北海道に渡ります。

帯広神社正面にある中島公園に、蓑を羽織った依田勉三の銅像があります。十勝原野開拓の先駆者となる勉三は、1853（嘉永6）年、伊豆に生まれました。当時の伊豆は、二宮尊徳の農本思想を土台に開拓精神が盛んで、勉三もその影響を受けます。未知の北海道への憧れは、1881（明治14）年、単身、勉三を十勝原野の踏査に向かわせるほどになります。

翌年、勉三は十勝開墾のための「晩成社」を設立。妻や親族とともに十勝川上流（現在の帯広市）に辿りつき、開墾作業に取り組みました。

開墾のはじめは豚とひとつ鍋

依田勉三が開拓者の生活を詠んだ句です。痩せた豚と一緒にひとつの鍋から食べていたのです。開拓の、度を越した過酷さは私たちの想像をはるかに超えていたのでしょう。

しかし、勉三の40余年に及ぶ開拓の苦闘こそが歴史であり、近代の帯広の基盤であることを忘れてはいけません。開拓の歴史を知ると、四季折々の景色も、人々の笑顔も、一層美しく、見え方が変わります。

十勝に根ざした銘菓店

今回は、北海道といえばコレ、名高い菓子店、帯広の「六花亭」を訪ねます。六花亭が運営する広大なガーデン「六花の森」では広報の須藤幸恵さんが背筋を伸ばして迎えてくださいました。ここではゆっくり歩くのです。森の広さは10ヘクタール、日高山脈を借景にした日本様式の庭園です。

あー気持ちがいい……。木立の中を流れる小川はさまざまな草花に縁取られ、きれ